

平成 30 年度

第 4 回 静岡県総合教育会議

議事録

平成 31 年 3 月 19 日 (火)

第4回 静岡県総合教育会議 議事録

1 開催日時 平成31年3月19日(火) 午前9時30分から11時30分まで

2 開催の場所 県庁別館8階第1会議室A、B、C

3 出席者 知事 川勝平太
教育長 木苗直秀
委員 渡邊靖乃
委員 藤井明
委員 加藤百合子
委員 伊東幸宏
委員 小野澤宏時

地域自立のための「人づくり・学校づくり」
実践委員会委員長 矢野弘典

事務局： ただいまから平成30年度第4回総合教育会議を開催いたします。
本日は、お忙しい中御出席を賜りまして、誠にありがとうございます。
私は、本日司会を務めます総合教育局の長澤と申します。よろしくお願いたします。

本日の議事でございますけれども、「1. 総合教育会議での協議事項への対応状況」、「2. 2019年度協議事項」、「3. 平成30年度県教育振興基本計画評価の報告」でございます。

それでは、開会に当たりまして、知事から御挨拶を申し上げます。

川勝知事： 皆様、おはようございます。

今日は、教育委員に御就任いただきました小野澤さんにも御出席いただきまして、ありがとうございます。皆様御案内のように、今年ラグビーのワールドカップが開かれますけれども、ラグビーワールドカップ日本代表として3回出場された御経歴の持ち主で、トライも歴代最多となる109トライ、テストマッチでも歴代4位となる55トライをされています。そういう御経歴の持ち主で、今年ワールドカップで静岡県の開催都市の応援団長というお立場の方でもありまして、我々はスポーツ、芸術等々を大事にしたいと思っております。ですから、知性を高める座学と技芸を磨く実学と、これは同じくらいに重要であります。

前に、こちらに柔道が専門の教育委員もいらしましたが、任期が来て辞められました。そうした中で、今回、小野澤さんに入っていて、そしてこれは議会にて、全会一致で認められました。

とはいいましても、ラグビーの経歴は、そのまま教育委員会としてす

ぐにプロになれるわけではありませんので、余り焦らずに、御自身の思われるところをそのまま言っていただければと思っております。

この総合教育会議は、皆様御承知のとおり、これは法律で決まっております。従来、教育に対して政治は介入できないように、教育の中立性、継続性、安定性と。この中で、特に中立性というのを大事にしまして、それから戦前の反省があって、政治が関与してはいけない。しかしながら、教育というのはやはり社会全体でやるべきであろうと、地域ぐるみでやるべきであろうという意見が20世紀の末ぐらいから大変盛んになりまして、そうした中で、各首長、地域で言えば市町の町長さん、市長さん、場合によっては村長さん、本県には村長はいませんが、それから県知事ですね。これが教育委員会に入って、そして議論をすると。

しかし、御覧になってわかりますように、首長というのは選挙で選ばれますけれども、必ずしも本当に識見が立派な人とは限らない場合があります。いろんな政治的な圧力で辞めさせられたり、ポピュリズムでなったりする人がいたり、特定のイデオロギーを持っている方もいらっしゃいます。それはやはり避けねばならないということで、私どもは全国に先駆けて、社会総がかりでやるための、その中身をどうつくるかということで、いわゆる「地域自立のための『人づくり・学校づくり』実践委員会」というのをまずは検討委員会から始めました。社会のいろんな方々に、加藤さんもその中に入っておられたわけですが、農業についてお詳しいし、またみずから企業も興されて、大学院もお出になられて、単に実学だけでなく、座学においても極めてレベルが高いというような方もいらっしゃったので、そういう人も入れ、元東芝ヨーロッパの社長をされ、NEXCO中日本のトップを務められた矢野さんに委員長になっていただきまして、20人弱の方々に社会総がかりの意見として侃侃諤諤の議論をしていただきました。

この議論は、大体2時間やりますけれども、私は聞き役なので、一切発言しません。ただし、委員長先生が、川勝何か感想があるかと言われたら、最後に一言、二言申し上げるという形でやっております。

今回も、今年度全体の教育行政を振り返るということで、それを総括しつつ、また来年度どういうことをやっていくかということをするわけですが、この同じ問題を社会総がかりを代表する実践委員会でもやっております。その中身については、私が言うよりも、客観的に委員長に言っていただくのが良いので、矢野委員長に今日お越しいただいて、矢野さんが来られない場合には、副委員長の文芸大副学長の池上先生に来ていただいていると、こういうことでございます。

そういう流れでやっております。ここは議決機関であると同時に執行機関であって、極めて重要な役割を果たすのが、この教育委員会であるということでございますが、そうした中でこの会が持たれているということを冒頭に申し上げたく存じます。

小野澤さん、どうぞよろしくお願いを申し上げます。後から、また御

挨拶いただきたいと思います。以上でございます。

事務局： ありがとうございます。
次に、木苗教育長から御挨拶をいただきます。よろしくお願いいたします。

木苗教育長： 皆さん、おはようございます。
御紹介いただきました教育長の木苗直秀でございます。
皆様には、日頃大変お世話になっております。早いもので、この総合教育会議は本年度4回目、すなわち最終回ということになります。今日は、矢野先生には御多忙の折にもかかわらず御出席いただきまして、どうもありがとうございます。

これまで3回の協議をとおしまして、「知性を高める学習の充実」や「技芸を磨く実学の奨励」としてのスポーツや、あるいは文化芸術について、また「学びを支える地域に根差した学校づくりの推進」などについて議論を深めることができた、そのように感じております。

本日は、お手元にコアスクール報告書をお配りしております。各高校において、個別の状況に応じた特色ある取組を進める、魅力ある学校づくり推進事業をやる、あるいは先ほどもちょっとお話に出ましたけれども、ラグビーワールドカップ開催に向けた学習など、実行できるものができるだけ早く着手し、また具体化に向けて時間を要するものについては、知事と十分にお話し合いをしながら、一步一步着実に進めてきております。

本日は、本年度の3回の会議を振り返るとともに、来年度の協議事項等について御協議いただくことになっております。2020年度からは、新しい学習指導要領に基づいた教育も始まることになっております。社会情勢はこのように刻々と変化しておりますけれども、これらに的確に対応するためには、教育委員会だけではなく、健康福祉、あるいは多文化共生など、知事部局と積極的に連携しながら進めることが重要であると、このようにも考えております。

ですから、施策の推進に当たりましては、関係部局と現状や課題を共有するとともに、効果的な事業展開ができるよう共同作業として取り組んでいるところであります。

皆様には、本日も忌憚のない御意見をいただきたく、よろしくお願いいたします。

簡単ではございますが、御挨拶とさせていただきます。本日はよろしくお願いいたします。

事務局： ありがとうございます。
続きまして、本日初めて総合教育会議に出席されました小野澤委員から御挨拶をいただきたく存じます。よろしくお願いいたします。

小野澤委員： 皆さん、おはようございます。

御紹介にあずかりました小野澤宏時です。

このような会議に参加するのは初めてなので、少し場も空気も読めずに緊張していますが、今年ラグビーワールドカップが静岡でいよいよ開催されます。それと同時に、その後のレガシーとして、エコパを拠点として、女性と子供に向けた地域総合型クラブ「アザレア・スポーツクラブ」が立ち上がり、そこの女子ラグビーの初代の監督に就任しました。

私自身は、聖光学院という中高一貫の男子校出身ですが、初めて女性を中心としたチームを指導することになりました。自分自身がまた多くの学びを女性からも子供からも、こういう環境からも学び取れるような、もちろん決定することは重要だと思うのですが、自分自身がこれからも学んでいけるような環境になればと思っていますので、皆さんからの色々な意見、それが自分の成長につながると思っています。

これからよろしくお願いします。（拍手）

事務局： ありがとうございます。

それでは、議事に入りたいと思います。

これからの議事進行は川勝知事をお願いいたします。

川勝知事： それでは、次第に基づきまして、本日の議事を進行させてください。まず、議事の1つ目は、総合教育会議での協議事項への対応状況です。事務局から資料の説明をお願いします。

事務局： それでは、事務局から説明いたします。

それでは、本編資料の1ページの資料1を御覧ください。

本年度の実践委員会の意見と総合教育会議における主な意見でございます。

本年度の実践委員会及び総合教育会議では、4つの議題について御協議いただきました。

まず、「『知性を高める学習』の充実（確かな学力の向上）」につきましては、実践委員会では、大学や自治体と連携し、生徒がイメージしやすい当事者性を持てるテーマで、継続的なワークショップを行うのは有意義である。教員のICT活用能力育成のために、学校内の支援体制づくりや民間人、大学生との連携、ICT支援員の養成が必要といった提案がございました。

総合教育会議では、下段にあります(1)コアスクールの取組により、中・長期的な視点で中間評価や修正を行い、新しい魅力ある学校をつくるのが大切。

(2)知識、技能は自宅で学習し、学校ではディスカッションをするなど、学校でできること、やるべきことを厳選すべき。

(4) ICT分野の人材バンクをつくり、シニア人材、学生等の専門性人材を登録し、支援すべき。

(6)基礎学力習得に人工知能を有効活用し、教員の時間的・精神的余裕を生み出すべきなど、教育委員の皆様から御意見をいただきました。

次に、2ページを御覧ください。

「『技芸を磨く実学』の奨励（スポーツ・文化芸術）」につきまして、実践委員会では、ラグビーワールドカップ2019の開催に合わせ、各国のラグビーの歴史等を織り混ぜた独自の教科書をつくり、小・中学校で授業ができないかなどといった御提案があり、総合教育会議では、(1)さまざまな実学に接し、自ら気付きを感じる機会を提供するために、毎年度1つ対象を選び、授業で教える仕組みがあってもよい。

(2)ラグビーの授業による先生の負担増を考え、小学5年、中学1・2年を対象に各学校の選択制とし、学校現場に無理がない形で進めてはどうか。

(3)教員が異文化に対する抵抗感をなくし、子供たちが相手を考える、伝え合うことを身に付ける教育を目指すべきなど、実学に関し、教育現場や地域の実態に即した御意見をいただきました。

次に、3ページを御覧ください。

「学びを支える地域に根差した学校づくりの推進」につきまして、実践委員会では、本県の教育理念である「有徳の人」の育成をより具体化した言葉として、「才徳兼備」という言葉が適切。

学校運営協議会と地域学校協働本部が常に協議し、実行していくサイクルをつくる必要があるといった御提案があり、総合教育会議では、(1)地域の歴史、文化等をまとめた「地域教本」を各地域でつくり、座学だけでなく、実践や体験の教材として活用してはどうか。

(3)学校業務の見直しに加え、県内の全学校に専門的な支援を行い、コミュニティ・スクールの体制を整えることが重要。

(5)スポーツ人材バンクの登録数を増やす必要性がある。

(8)静岡型ホストファミリー制度を構築し、地域の人も県内にいながらグローバル化を進めることが大切など、今後の地域と学校の在り方について御意見をいただきました。

次に、4ページの「誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進」につきまして、実践委員会では、小さい頃からハンディキャップをどう捉えるかを学ぶことが大事であり、障害を個性として受け入れる寛容な心を醸成する教育環境をつくることが大切などといった御提案があり、総合教育会議では、(1)発達障害のある子供を将来的に自立させ、社会参加させるために、通級指導教室で子供たちが相互に学ぶことは大きい。教員不足が課題であり、県単独の財源による人員確保も必要。

(2)発達障害の子供への支援は高校生にまで広がっており、将来的には県内東中西部に各拠点校を開設し、巡回通級の全県展開や専門性を高める教員研修の充実が必要。

(3)不登校や障害のある子などを特別視せず、一人の人間として接することが大切。子供に居場所をつくり、本物に触れる機会をつくるなど、教える側もゆとりを持ちながら、きめ細かい指導が必要など、特別支援教育について、具体的な御意見をいただきました。

続きまして、5ページの資料2を御覧ください。

総合教育会議での協議事項への対応状況につきまして報告をいたします。

実践委員会、総合教育会議の本年度の議題と昨年度までに協議した議題について、平成31年度に事業化される主な施策をまとめてございます。

新しい事業には、表の左側に「新規」と、既存の事業を拡充した事業につきましては「拡充」と記載してございます。拡充した事業につきましては、拡充した内容を太字で表示してございます。

また、表の左側の丸囲みの数字とページ番号がついている事業につきましては、別冊の参考資料の事業番号とページに対応しております。

それでは、最初に5ページの(1)「『知性を高める学習』の充実」です。

静岡式35人学級の編制につきましては、平成29年度から段階的に学級編制の下限人数の設定を撤廃してまいりましたが、平成31年度に中学3年生までの全学年で撤廃が完了いたします。

次に、「魅力ある学校づくり推進事業」では、専門家等による新学科検討委員会を設置し、スポーツ科、演劇科などの新学科設置に向けた検討を進めるほか、過疎地域の学校の部活動の活性化や地域連携等の取組による学校の魅力のさらなる向上に取り組んでまいります。

次に、6ページの(2)「『技芸を磨く実学』の奨励」を御覧ください。

上から3つ目のラグビーワールドカップ2019開催推進事業につきましては、第2回総合教育会議で御議論いただいた内容を踏まえ、今年度作成しましたラグビーの歴史や文化、ラグビーの精神、競技ルール等を掲載した教本等を県内全ての国公立・私立の小・中学校、義務教育学校に配付し、来年度は指定された県内72校の小学5年生及び中学1年生を対象にラグビーの授業を実施いたします。また、授業の実施だけでなく、県内の小中高生を本県での開催試合に観戦招待いたします。

次に、子供が文化と出会う機会創出事業でございます。

子供たちが本物に触れる機会を充実させるために、プロオーケストラやSPACが各学校やホールを訪問し、子供たちが演奏や演劇鑑賞する機会を増加いたします。

次に、地域スポーツクラブ推進事業でございます。

平成28年度から、磐田市をモデルに中学生を対象とした地域スポーツ部活を実施してまいりました。この中学生対象のスポーツ部活は、磐田市が主体となって運営することとし、新たに高校生対象のスポーツ塾を県が磐田市に委託して実施してまいります。

次に、スポーツ人材バンクでございます。

第3回総合教育会議におきまして、県内の学校数を考えると、スポーツ人材バンクへの登録数は今後さらに増やしていく必要があるとの御意

見をいただきました。

来年度は、各競技団体等との連携を強化し、指導者の登録増加を図ってまいります。

次に、8ページを御覧ください。

(3)「学びを支える地域に根差した学校づくりの推進」でございます。

スクール・サポート・スタッフ配置事業では、教員の多忙化を解消し、教員が児童・生徒と向き合う時間を確保するために、事務作業全般を支援する地域の人材を全公立小・中学校に配置いたします。

次に、9ページを御覧ください。

(4)「誰もが夢と希望を持ち社会の担い手となる教育の推進」についてでございます。

まず、未来を切り拓くDream授業につきましては、今年度、木苗教育長、加藤教育委員に講師として御協力いただき、試行で実施したところでもあります。その結果、受講者だけでなく、保護者や担任教諭からも多くの好評の声をいただいたことから、Dream事業を引き続き実施することとし、来年度は日程を2泊3日から3泊4日に延ばし、実施いたします。

次に、「外国人等学ぶ機会拡充事業」及び「外国人生徒みらいサポート事業」でございます。

外国人等、日本語指導が必要な児童・生徒が年々増加していることから、学校現場における日本語指導の支援などに取り組みます。

次に、心のバリアフリー促進事業でございます。

特別支援学校の児童・生徒と地域との連携を深め、障害の有無を超え、多様性を認め合う力を育成いたします。

次に、「ネット依存対策推進事業」及び「ゲーム障害・ネット依存対策事業」でございます。

新たな疾患であるゲーム障害・ネット依存に対し、教育と医療の分野が連携し、予防対策や回復プログラムを実施することで、支援体制の構築を図ります。

次に、「SNSを活用した相談体制構築事業」及び「若者こころのSOSサポート事業」でございます。

ICTを活用した相談窓口を周知するほか、LINE相談を拡充し、若年層の自殺対策の強化及びいじめを含む様々な悩みに対する早期対応に向けた体制を構築いたします。

以上が本年度の協議事項に関する主な対応でございます。

続きまして、昨年度までの協議事項について、11ページを御覧ください。

(1)「グローバル人材の育成」につきましては、グローバル人材育成支援事業により、県内高等教育機関のグローバル化支援や外国人留学生の受け入れ、日本人学生の海外留学を促進することにより、地域や世界に貢献できるグローバル人材の育成を図ってまいります。

また、しずおか型英語教育充実事業により、外部専門機関と連携し、

教員の指導力の向上等を進めてまいります。

以上が平成31年度当初予算におきまして、新たに取り組む事業、あるいは事業内容を拡充した主な事業でございます。

また、別冊の参考資料の1ページから20ページまでが個別事業の詳細を記載したもの、21ページからはこれまでの協議事項に関する事業をまとめてございます。

最後に、机上配付資料といたしまして、「平成30年度コアスクール報告書」及び「未来を切り拓くDream授業報告書」を配付しましたので、参考に御覧いただきたいと存じます。

以上で事務局からの説明を終わります。

川 勝 知 事： 要領よい説明をいただきまして、ありがとうございました。

この総合教育会議での協議内容が尊重されまして、来年度の当初予算で数多くの提案が事業化できたと存じます。

それでは、今年度の議論を振り返りまして、皆様から御意見、御感想などいただきたく存じます。

どなたからでも。矢野さん、何かありますか。

実践委員会委員長の矢野さんから口火を切っていただきます。

矢 野 委 員 長： 矢野でございます。よろしくお願いたします。

実践委員会ができて、間もなく4年が経ちます。今年度を振り返ってみまして、総合教育会議と実践委員会との連携が年々深まってきているということを実感しております。

私どもの提案が、この総合教育会議で取り上げられまして、それが決定されて、そして実行に移っているということが大変うれしく思っております。

こういう関係でありますから、来年度についても同じような意気込みで臨んでまいりたいと思っております。

特に教育委員会の先生方には、実践委員会の傍聴をなさっていただいております。そういう意味でも大変ありがたいことです。

それでは、全体について今年度一年間、実践委員会で議論したことを申し上げます。

静岡県が大方針として掲げている「富国有徳の国づくり」、そのための「有徳の人」づくりを実践するために文・武・芸の三道の鼎立。実に、私は見事な考え方が打ち立てられておきまして、ぜひそれを実現したいと思っております。この一年間、実践委員会で各分野のエキスパートの皆さんと議論して感じたことは、もう一步、より敷衍したメッセージが必要であろうと考えまして議論した結果、「才徳兼備」の人づくりという考え方が固まってまいりました。

この資料1の中にも書かれておりますけれども、何か目新しいことを始めるのではなくて、今までのやり方を一層深めるための考え方、姿勢

であります。

当然、才能を磨くというのは学校教育の基本で、言わずもがなと言われることなのかもしれませんが、それをしっかり磨きつつ、人徳といえますか、徳の育成を図る。これが大事なのではないかと考えています。

そういう意味で、来年度も引き続きそういう考え方を続けていきたいと思っています。

それから、少し個別のテーマについて、この資料1に出ている言葉から幾つか取り上げてお話ししたいと思います。まず外国語を小学校からしっかり教育していこうということですが、言語というのはやはり道具でありますから、これはしっかり磨いておかないと自分の言いたいことが言えないということであり、とても大事なことです。

しかし、道具ばかり磨いても、実は役には余り立たないのでありまして、中身が大事なのですね。中身をどのように鍛えるかといったら、日本語で鍛えるのが一番だと思っています。

日本語で論理的に考え、そして敷衍し、方向性を出していく。そういう中身さえあれば、日頃磨いているツールがより生きてきます。

ですから、小学校や中学校での外国語教育、特に英語教育ですが、どのレベルを目指すかということを決めて取り組んだらいいと思います。

個人的には、小学生は自己紹介がしっかりできれば、それで相当良いのではないかと思います。私は、国際ビジネスを欧米で長くやってきましたが、流暢なネイティブの英語が話せる必要は全くないと感じています。これは本当に、全然ないと言っていいぐらいですね。私自身がろくな発音もできないでおりましたが、何ら支障を感じませんでした。また、中国系やインド系の人たちが全くわかりにくい英語を駆使して、怖めず臆せずやって、それで立派に仕事が進んでいくのですね。私もそれを見て、大いに自信をつけて、怖めず臆せずやっていましたが、一向に支障を来すことはありませんでした。

そうはいっても、やはりきちんとした英語を話して読んで書けるというのはとても大事なことでありますので、そういう点での教育を学校でしっかりやっていただくのは、とても素晴らしいことです。その上で、中身を日本語で鍛えていくということが大事ではないかと思っています。

それから、今年のラグビーワールドカップ、それから来年のオリンピック・パラリンピックを機会に、静岡県自らの国際化ということを進める絶好の機会と捉えて、各市町で取り組んでいく必要があると思います。

外国の人たちが来て合宿をしたり、あるいはプレーをしたりしていくわけですが、そういうものを通じて、ぜひ内なる国際化を進めるということが大事ではないかと思っています。

国際化といっても、外国から日本に来た人たちは、街でおいしいもの

を食べたり、どこかの家に呼ばれて少し歓談をしたり、そういうことが一番の勉強になるんですね。それを迎える子供たちも一緒になって交流すれば、自然に国際化というのは進んでいくのだらうと思いますので、今年、来年のこの機会を大事にしていくことが将来につながるはずで

す。

それから、スポーツ人材バンクについては、来年度一層強化するという説明が事務局からありましたので、ぜひお願いしたい。なかなか人材バンクの人数が増えないのは基準の見直しも必要なのではないでしょうか。またそれは来年度の議論にしたら良いと思います。

それから、障害者の問題につきましては、静岡県は実にすばらしい事例があるのです。県西部に農業法人がございまして、そこを見学に行きましたところ、89人の社員のうち、24人が障害者です。知的障害者が大部分であります。それにふさわしい仕事を用意して、そしてでき上がった作物などを、主としておすし屋さんに出す色々な小さな野菜類ですが、それを市場価格で売っています。会社は黒字で、社員にはきちっと世間並みの給料を払っているということでもありますから、これは誠に頼もしい限りのビジネスモデルでありまして、こういったものが広がっていく必要があるだらうと思います。

これは、要するに障害者への支援という面をもう一つ伸ばして、経済界がある意味では障害者教育に協力しているという事例です。

だからといって、特別扱いしているのではなくて、きちっとビジネスとして成り立っているということでもありますから、そういう事例も参考にしながらやっていったら良いと思います。

それから、もう一つ強調したいのは音読です。これは、この会議でも議論されましたが、学校で長時間やる必要はありません。古典に親しんで、音を体で感ずると。自分の声を聞くと同時に、人が朗読している声を聞く。こういうことが子供たちの理解を深め、感性を高めることになるのではないかと思っております。

ちょっと思いつくままに幾つか申し上げましたが、どうぞよろしくお願ひします。

川 勝 知 事： 矢野委員長、ありがとうございました。

今、議論しているのは、総合教育会議での協議事項の対応状況に関することですけれども、もう既に今の矢野さんから、来年度の協議事項についての御意見もあるので、次の協議事項の2つ目の「2019年度の協議事項」についても、併せて先に簡単に御紹介いただいて、あとはもうこれまでの振り返りとそれから今後すべきことと両方、自由に御意見いただくようにした方が良いかと思っておりますので、簡単にお願ひします。

事 務 局： それでは、本編資料の14ページでございます。資料3を御覧ください。
「2019年度の総合教育会議の協議事項（案）」でございます。

2019年度の総合教育会議では、世界共通の目標であるSDGsのフロントランナーである本県において、「才徳兼備」で社会貢献できる「有徳の人」の育成をどのように進めていくかの観点で、以下の4つの項目について御協議いただくことを提案しております。

まず、1つ目は、「国際社会で活躍できるグローバル人材の育成」でございます。

想定される論点は、ラグビーワールドカップ2019、東京2020オリンピック・パラリンピック及び同文化プログラム等の国際イベントや、海外修学旅行、グローバル人材育成基金事業等を通じた特色のある教育の推進、また英語教科化に対応した外国語教育の充実などでございます。

2つ目の協議事項は、「確かな学力の向上」でございます。

想定される論点は、知識の理解の質を高める読解力等の育成、児童・生徒の資質、能力を引き出す探求的な学習の推進、新しい専門学科等の設置や、学年・学級規模のあり方といった高等学校における魅力ある教育環境の充実、全国学力・学習状況調査及び結果の効果的な活用などでございます。

3つ目の論点は、「一人一人のニーズに対応した教育の充実」でございます。

想定される論点は、特別支援教育における就学前から就労までの切れ目のない支援、発達障害への支援の充実、また外国人労働者受け入れ拡大を踏まえ、日本語指導を初め、幅広い学びやキャリア教育の充実などでございます。

4つ目の協議事項は、「ライフステージに対応した教育の充実」でございます。

想定される論点は、高等教育機関と初等・中等教育の連携の在り方、また社会人の実践的な職業教育や学び直しへの対応などでございます。

以上が協議事項の提案ですが、状況に応じて、これら以外の事項についても協議することがありますことを御承知おき願います。

最後に、年間スケジュールでございますが、次年度の総合教育会議、実践委員会の開催は、年間各4回を予定しております。

以上で事務局からの説明を終わります。

川 勝 知 事： ありがとうございました。

矢野さんからは、国際社会、また確かな学力、両方にかかわる御提言も入っておりました。そこで、11時ぐらいを目処に、これまでの振り返りと今後、協議といたしますか、御提案していただくことがあれば、来年度の協議事項の中に入れていきたいと思っておりますので、御自由に御発言をいただければと存じます。

いかがでしょうか。では、藤井委員からどうぞ。

藤 井 委 員： 先ほど事務局から御説明いただいた内容に関しては、色々な策を既に

講じているわけなので、私とその現場に行くチャンスは余りなくて、肌で感じることは余り多くありませんけれども、いろんな変化が見られていると思いますし、効果も出てきていると思います。

ただ、それでも尚且つ教育現場の大多数は、私自身に先入観が強いのかもかもしれませんけれども、旧態依然とした閉鎖社会の中で教育が行われているという受け止め方をしています。いわば、一律を重んじるというか、均一を是とするような教育の感覚がまだまだ長く続いていると思います。

そういう点で、これまで実施してきた施策を更に進めて、具体策を講じていく、その継続性というのが非常に重要だと思います。

そうした中で、教育の現場は10年とか20年、あるいは50年でも良いのですが、遠い将来、先を見据えて、その時に活躍する人たちを育てるために、今どういう教育に力を入れなければいけないかという観点がかなり薄いのではないかなという気がします。

その点で、何をすれば、それが変わっていくかというのは、一つの策を講じれば全てが変わるということはないわけで、非常に難しいのですが、閉鎖社会のあり方に関して、突破口として、この変革を牽引するような新たな学校を1校試行錯誤でつくってみるのも手ではないかなと思います。

それは何かというと、以前、総合教育会議の中でも一言触れたと思いますが、公立の全寮制の中高一貫校。こういうものをつくることによって、もちろん色々な工夫が必要なので、ただそれをつくれれば、箱をつくれれば良いということではないわけですがけれども、試行錯誤してみる価値は十分にあると思います。

その全寮制の中高一貫校というのは、少数精鋭で、IT技術を存分に駆使するような教育方針でもって、尚且つバカロレアのベースもつくっていく構想です。過疎地にあえてそうした学校を設立することによって、地域社会に対する活性化、貢献にもつながる可能性を追求していきたいと思います。

随分前になりますが、新聞の記事に、広島県で実際にそれを実践する話が出ておりました。中高一貫校ですけれども、瀬戸内海の島に68億円の予算をつけて、新たな学校をつくるということですがけれども、1学年の定員が40人で、高校生になると外国人留学生を20人程度受け入れるような計画がありまして、実際に広島県の県内で昨年3回に渡って説明会を開いたところ、延べ1,500人余りの方々が参加されたということです。それでは教える側の先生はどうする、どうやって集めるんだということもあるし、いろんな工夫は必要なのですが、これは一つの例ですがけれども、こういった突破口を一つ設けることによって、県内の教育現場に影響力を及ぼすということがおこがましいですけど、時間をかけて、違いを結果として出していくという工夫の余地があるのではないかなと思います。

来年度の一つのテーマの中に、「国際社会に活躍できるグローバル人材の育成」がありますけれども、このグローバル人材というのは、いつも申し上げているとおり、必ずしも語学ができたり、国際社会で活躍できる人を全て指すのではなくて、私は国内外を問わず、どんな社会でも活躍できる人がグローバル人材だと思います。そういった人材を育てる一つの有力な手段として、今申し上げたようなトライアルができると良いと思いますし、それによって静岡県先進教育というのを社会に対して示すことができれば、こんな良い話はないのではないかと思います。

この学校自体をインターナショナルスクールという位置付けにするのか、あるいは公立の学校だけれども外国人留学生もたくさん入れるという位置付けにするのか、色々な考えがあると思いますけれども、とにかく国際色豊かで多様性を凝縮したような学校にしたいなという思いがありますので、ぜひこういう観点からテーマとして扱っていただけるとありがたいと思います。以上です。

川 勝 知 事： 思い切った提言、ありがとうございます。
加藤委員、お願いします。

加 藤 委 員： 総まとめで拝見すると非常に多くのことが形になって実行されるのだな、されたのだなというのを本当に改めて思います。

ただ、教育事業を外部で、民間でやっていて、現場の先生方と会話することが今多くなっています、そうするとその中で、新しいことをやっているとこの感じが全く現場にはないというのが一つ大きな課題かなと思っています。

実際、先生方の不祥事もなかなかなくならないですし、おそらく先生になりたての頃の子供たちを立派に育てたいといった力湧き出るモチベーションのようなものがすっかり蓋をされてしまって、何を言っても、やっても、どうにも変わらないし、仕方がないよねという雰囲気はかなり蔓延しているので、ちょっとやそっと外部から、仕組みでちょっと振り落としたところで、現場は余り変わらないなというのが危機感としてあります。

ですから、どうしたら良いのかというので色々考えると、我々がやっている事業のジュニアビレッジで、これは大きな成果かなというのは、1人の卒業生が新聞に投稿しまして、これがおもしろい内容なのですね。ちょっと読み上げますね。

「中学校入学したての頃は、勉強なんて役に立たないと勉強に意味を見出すことができず、全く勉強しませんでした。そんな中、地域問題を解決しようと活動している団体（ジュニアビレッジ）に入りました。活動で、多くの知的でおもしろい大人に出会い、衝撃を受けました。皆、大人なのに活動を全力で楽しんでいて、輝いて見えたからです。今では、せっかく与えられた教育の権利を楽しみながら、使い倒してやろう

と思えるようになりました」、という投稿があつて、ここに何か凝縮されているのではないかなど。それは、大人であっても子供であっても同じで、内的動機って先生方はおっしゃるのですが、そこを引き出せるかどうかにかかっているかなと思います。

ですから、色々な施策をしようも、プログラミングをやらせようとか、英語をやらせようといつても、本人たちが楽しんで、何かもつとつと勉強したいと思わない限り、プログラミングなどは余計、あれは好きな人でないと上手にならない典型的な分野なので、好奇心を持てるかどうかにかかっています。

そう考えると、では何をすべきかという、やはり校長先生って経営者だと思うのですね。何かマニフェスト的な経営方針を地域に打ち出して、地域から選挙で選ばれるとか、株主は住民だとすると、住民がきちっと何人かの中から選ぶとか、藤井さんもおっしゃられましたけど閉じられてしまっている、開かれた、もう少し自由な学校運営というのが、そういう校長先生が思いっきり外に打ち出すことで、表現することでできてくるのではないかなと思っています。校長先生が、首長さんほど前に出る必要はないのかもしれないですけど、もう少し表現する機会を設けたらどうなのか、変わってくるのではないかなと思いました。

来年度なのか、大分時間がかかるのかもしれないですけど、そういう会話の機会をつくると少し解決に向かうかなと思っています。

川 勝 知 事： ラディカルな、良い意味でのラディカルな御提言がお二人から続きまして。

では、渡邊委員、お願いします。

渡 邊 委 員： 私も、お二人に乗っかるというわけではありませんが、私自身も「NPOみしまびと」というところで、かつては映画をつくるという事業で地域の人たちを結ぶということをやりまして、またその次の段階として、そこで培った大人の人脈を地域の子供たちを育むことに使いましょうという地域の高校生の部室をつくろうというプロジェクトに今、取り組んでいるところです。

その部室にどんな生徒を集めたいかということに関しては、やはり地域の高校の先生方にも御協力をいただいたり、また他の地域の人々がかかわる機会も多くつくったりすることによって、そこに参加する高校生が、より静岡県の大人、三島の大人ってすごいと思うことを感じてもらうことによって、学びへのモチベーションをそちらに結びつくような活動、地域課題を解決するというを地域の子供たちと大人と一緒にやっていく場をつくろうとしています。

私たちの地域に関わらず、昨今、新聞を見ておりますと、本当に中学・高校と連携して、あんなことをやりました、こんなことをやりましたという事例がたくさん挙がってくるわけです。それというのは、県で

行っています「未来を切り拓くDream授業」が非常にトップリーダーを輩出するということを目的とするのであれば、それにいいフォロワーをつくっていく。また、もっと細かい、本当の土着の地域リーダーを生み出していくということにつながるのではないかと思います。

そういう静岡県あちらこちらに散らばっている大人と子供が結びついて何かをやろうとする、そういうような事業を応援するということも、私たちに必要な視点ではないかなと感じている次第です。

先ほど、皆様の机上にありますコアスクールの報告書が私たちの教育委員会の定例会に提出されたときにも、各委員から声が上がったところですが、コアスクールの目標って何だろうと。特に、進学コアスクールの生徒たちが軒並み、まずやれていることが有名大学を訪問するというをやっているという、それは一体何のための有名大学訪問なのかと。その大学に入ることが目的化してしまっていないだろうかということ非常に私たちは危惧して、そこで指摘させていただきました。

子供たちが、大きな夢を持って、大きな視点を持って、こういうことをやりたいからその学校を選ぶのだというモチベーションにつながっているということが本当の進学、本当の意味で世界に羽ばたくためのステップとしての進学ということ意識させるということなので、このようなコアスクールの取り組みに関しても、従来の価値観とは違う視点が先生方、学校の間にも求められているということだと思います。

また、私たちの社会教育の現場で非常に危惧されていることが、中・高生の自己肯定感が非常に低いということです。どうやったら中・高生の自己肯定感を上げられるだろうか考えたときに、それを取り巻く大人たちの影響が非常に大きく、保護者と地域の人たち、大人も巻き込んで何かをやっていくという視点が次年度以降の総合教育会議の視点に含まれたらいいなと思いましたので、発言させていただきました。

川 勝 知 事： ありがとうございました。
 それでは、伊東委員いかがですか。

伊 東 委 員： グローバル化に関して、県内にこれから外国人が益々増えてくるという環境になりますね。大学も留学生を増やそうということで、昨日も県大の中期目標の策定とかをやっていたのですが、県大でも数値目標を立てて、外国人留学生を増やしていくという方針を出していましたし、静大もそうです。それから、労働者として県内に来る外国人も益々増えてきます。

そういうことが既に明らかになっているので、その外国人というのを静岡県の子供たちのグローバル化に役立てるという方策を今から考えておいた方がいいのかなと思います。

もちろん、その外国人、たくさんの労働者が来るということに対して、社会的な危惧というの、コミュニティに馴染んでいけるかという

ところを危惧されているところがあるので、むしろ子供たちの方が自然に馴染んでいけると思うのですよね。

だから、県内に居住する外国人というのを県内の子供たちのグローバル化という目的と、それからその外国人の日本社会への溶け込みというのと、色々な目的で進めていけばいいと思うのですよね。

そうすると、労働者として県内に来られる方というのに働き掛けようとする、どうしても企業の協力というのが必要となると思うので、そういう意味で産業界と、それから大学と、それから行政と市民団体みたいな、そういうような枠組みで、これから外国人がもっと増えてくる社会の中でのグローバル化みたいな、モデルみたいなのがつくれるとおもしろいのかなというのの一つですね。

それから、インターナショナルスクールに関して、先ほど藤井委員から話がありました。私も前々から、そういう学校というのが必要かなと思っているのですが、例えば、僕が前から言っていたのは、大学でも、あるいは企業でも、30代、40代の優秀な研究者を何年間か、5年間とか呼びたいという時に、なかなか来てくれないのですよ。何で来てくれないかという、子供を連れてきても、英語で勉強できる学校がないので、いつも止まってしまうわけですよ。

だから、少なくとも英語だけできちんと小学校課程、中学校課程、あるいは高等学校課程が勉強できるようなものが、小さくてもいいからどこかにつくれないのかというので、僕は、昔は附属の1クラスをそういうクラスにしろと教育学部に言っていて、なかなか言うことを聞いてくれないということもありました。

だから、何かそういうものをつくれればいいかなと思うのですが、そうするとネックとなるのは、先ほど藤井委員は過疎地でもいいからと言ったけれども、やはり過疎地だと、先ほど言ったような外国人のニーズには応えられないですね。日本に来て、何でわざわざ子供と離れて暮らさなければいけないのだという話になってしまうものですからね。

そうすると静岡市、あるいは浜松市に欲しいと。そうすると、これまた次の話になりますが、どうも県教委というのが静岡市立、浜松市立の学校と余りコミュニケーションが良く取れていないのです。何か色々こういう施策を考えても、僕が目にするのは浜松市が主なので、伝わってこないのですよね。それぞれ独立してやれば良い話なのですが、でもお互いに何を考えて、何をやっているんだということをもっと情報伝達して、それからそれに対しての具体的な行動としての反応がないと、何かちょっと寂しいなという気がしますね。

それからもう一つ、全く話が変わって、プログラミング教育というのが小学校にこれから導入されてきますが、さっき加藤委員は、あんなものは好きな人でないと、というふうに言ったけれども、プログラミング教育って、僕自身はアルゴリズム教育の方が本質であって、プログラムというのはどうでもいいというか、とりあえず一つの言葉ですからね。

言葉は道具だというふうにおっしゃっていましたが、もうプログラミング言語なんて、まさに道具ですよ。

そこを一生懸命勉強するということほどばかばかしいことはなくて、やはり基本はアルゴリズムというか、論理的な思考法だとか、問題解決手順というのを論理的に組み立てて、それを自分以外の人もわかるレベルで表現するということなのですよ。

そういうプログラミング教育をできる先生がどのくらいいるのかということなのですよ。これは小学校だけではなくて、ずっと昔から、大学でも問題になっていて、要するに情報工学なんていうのはすごく若い学問で、多分1970年代ぐらいに日本で最初の情報工学科ができたような。大体、僕が習っていた頃というのは、情報出身の先生はいませんでした。そもそも70年代にしか大学はできなかったから。だから、全然情報的な教育を受けていなかった人が情報を教えていたのです。その流れがずっと続いているのです。

今、これを小学生とかにそういうものを入れて、下手なプログラミング教育をすると、それこそプログラミングは私には無理だと、関係ない世界だというふうに思ってしまう子供を増やすだけだというような気がしますね。

だから、それをどうすればいいかということと非常に難しいのですが、まず一つは先生方の教育というのをもっともっと大規模に真剣にやらなければいけないのではないかなと思います。

今、おやりになっているということは承知していますし、静大の遠山さんか何かと一緒にテキストをつくって実施していることも承知していますけれども、もう少し規模とかスピードというのを考えていかないといけないのかなと思います。以上です。

小野澤委員： この状態で順番が来るのだらうと思いつつ、手に汗握っていました。

僕は、スポーツが専門分野なので、スポーツのことですと、今おもしろいなと思うのが、ラグビーワールドカップを一つのフックに、色々なところがごちゃ混ぜになってきているのかなというのは感じています。

この前も、掛川城のプロジェクトマップ、あれは掛川西高の生徒がやったらしくて、吉川先生から直接送られてきたのですが、とても上手だなと思いました。そこのところで、自分の内面からの動機付けがされている生徒だと、やはりそういうICTみたいなところも、もはや興味のある子はどんどん学んでいく。僕らではもう追いつけないですよ。このようなものを高校生がつくるなんて、後日動画で送ってもらって、もう一回見てもすごいなあと感じました。

ですから、スポーツも一つ、団体競技と個人競技のところすみ分けでもおもしろいかなとは昔から思っていて、個人競技として、自分の体の技術を獲得する。それともう一つが、集団の場合はそれこそ集団での問題解決の方が重要になってくるので、今後もしかするとそこがプロ

グラミング的な発想というか、みんなで何をしなければいけないのか、どこでこの情報を伝えることがこの集団が動くのかという時間軸でやっぱり考えて、コミュニケーションしていかなければいけないので、そのあたりも、色々そこからの動機付けで、論理的思考が生まれてくる可能性はあります。

親しくしているところに、「YC&AC」という「横浜カントリー・アンド・アスレチック・クラブ」があります。「YC&AC」の外国人クラブの方によく行くのですが、日本のスポーツが上陸した場所で、そこに慶応大学の学生が見に来て、何かそこからスポーツを大学でもやるみたいな。昨年、150周年記念イベントみたいなのがあって、もう150年、今は場所が変わって横浜から山手の方にあるのですが、そこで地域総合型のクラブをやっているのですよね。

学校体育もある、横浜にはマリノスもある、プロ野球もある、全部あるのに、なぜそこでわざわざなどという話をそのの理事の人に尋ねてみたところ、学校教育で教えてくれないコミュニケーションスポーツを補っているという話を聞いたことがすごく印象的でした。

ですから、そこには色々あるのですよね。ボーリングもあれば、ローンボールドもあるし、室内に行くと同じフロアの中でスヌーカーもあれば、ナインボールもある。さらにそこにバーカウンターもあって、室内であっても、観るスタンドが3段ぐらいあって、要は観る、する、支えるみたいなことが、もはや150年前からされている。そこでヨーロッパ式とアメリカ式の台が同じところにあることによって、大人が子供をそこに連れて行く。「お父さん、これは何のためにあるの」みたいな。それを大人が知っていなければいけない。このルールを教えるのではなく、これにはこういう歴史があってというのを知っていることが大人だみたいな。そのためにこの場があるという、その学びの環境のためにそういう箱があるのだよということを言われたのが、すごく印象的でした。

ですから、スポーツを教えるというのは、何かスポーツ自体をもっと今後に発展する学びの動機付けのために使ってもらっても良いのではないのかなと思っています。

それこそ、先ほどから皆さん言われている国際交流についても、外国人と、労働者であれば外国人労働者が健全に遊べる環境。それを非日常としてのスポーツ環境みたいなところで、外国人クラブみたいなことを立ち上げ、そこに日本人が逆に行く。そうするとスポーツへの接し方が、それだけで文化としても学びがあると思うのです。それではどうするみたいなこともあると思うので、何かスポーツは教えるのではなく、次の学びのための環境設定にするというのもおもしろいのではないかなと思いつながりながら聞いていました。以上です。

川 勝 知 事： どうもありがとうございました。
木苗先生、何か御感想はありますか。

木苗教育長： 今、各委員の方々のお話を聞かせていただきました。小野澤委員には、まだお名前もきちんと紹介していなくて申し訳ありませんでした。今言われたように、やはりスポーツを一つの動機付けにしてということで、私もスポーツが大好きです。今年はラグビーワールドカップがありますし、それから来年にはオリンピック・パラリンピックがあります。それが教育にどのように活かされるかという事で、我々も静岡の歴史、文化、産業を含めて、子供たちが理解する、そしてそれを海外から来られた、もちろん当日といいますか、実際の試合の時もそうですが、今もう既に合宿とか何かで来ていますよね。そうして来日した方々と接触の時にどのように活かしていくか。既にかなり準備してきているのですが、要するに本番だけじゃなくて、それまでの工程が大事なことだと思っております。

特に、教育という面で考えていくと、今、文科省が色々を出していますが、やはり静岡は、静岡方式という大変ですけども、そういうものも含めて考えていかなければいけないのかなと、そんな感じもしております。

今、5人の委員の皆さんからそれぞれお話がありました。いつも言われていることですが、我々も実際に現場を見に行っていますが、それはやはり年に10回程度。それから、今日は出ませんでした。今は特別支援学校へ行く機会がかなり増えています。そういう現場を見ていくと、どうしても障害の程度が違うものですから、皆さんから色々御希望がありますので、それにできるだけ合わせるようにしておりますけれども、それでは学校を卒業してからどうするのだと。やはりそれも、彼らもやはり色々社会で働きたいのだと、活躍したいのだということもありますので、そういうようなものも含めて考える。

各学校でも、今は普通の小学校、中学でも、そういうようなハンディキャップを持った方と健常の方が一緒になって学ぶという、こういうような共学も積極的にやっておりますけれども、そういう中で特に静岡の教育というものは、もちろん今までも川勝知事の、あるいは矢野先生からの色々なアドバイスもいただきながら、前には進んでいますが、次世代に向かってどうするのかということは極めて大事なことで、この辺を整理整頓して取り掛かっていかなければならないと思っております。

それから、現場で見ると思った以上に大変な思いを先生方もしています。働き方改革というのでは、先生方はかなり大変な思いをしているのもよくわかりましたが、それを十分に補って、そして地域と一緒にやって教育というものはやらなければいけないというのでは、静岡県は相当良い方向に向かいつつあるのかなと、そんな感じもしております。

今日は、私は今まで皆さんが御発言いただいたことも整理整頓しながら、次に向けてやっていきたいと思っておりますけれども、どうしてもそれぞ

れ、小学校、中学校、高校、さらには静岡県の場合は幼児教育も担当しておりますし、それから大学との連携も相当強くしておりますので、そうすると幼稚園、あるいは保育園から大学までということで活動しております。そういう中で、静岡の教育は皆さんの色々な御支援、あるいは御助言をいただきながら、前に進めたいということでは、今日は非常に良い勉強をさせていただいていると思います。

これについても、十分にまとめて、また皆さんとさらに常に意見交換しながら、前に進んでいきたいと思っております。ありがとうございました。

川 勝 知 事： どうもありがとうございました。

これまで皆さんが提言していただいたことを確実に施策に落とし込んでいただいています。それを踏まえて、これからどういうことをしていくかということで、資料3に関わることをお話しいただいていると思いますが、冒頭、藤井委員から、「国際社会で活躍できるグローバル人材の育成」、こうしたものも「内外で活躍できる人材の育成」ということで十分だというふうに、このテーマを変えることもできますね。

それから2つ目、「確かな学力の向上」とありますけれども、加藤委員からは、ジュニアビレッジで実際にいろいろと大人と一緒に中学生がビジネスに関わるようなことをして行って、初めて学びの重要さに気付くということ、これは学力というよりも実力ですね。確かな実力を育成するということで、学力はそうした実力のうちの一つということではないかと思えます。

それから、渡邊委員から、一人一人のニーズ、こちらは支援学区、特別支援の子とか外国人のお子さん方がベースになって、この一人一人のニーズという言葉になっていますけれども、むしろこのDreamですね。そういう子供たちの夢を、志をかなえるためにはどうしたらいいかと。ニーズとDreamに対応するような教育を社会がどう提供するかということで、最後のこのライフステージというのは、中高一貫、連携ということがありますけれども、藤井委員から、いわゆる全寮制の学校ですね。こうしたものを公立でもどこか実験的にやってみたらどうかということで、広島は島だということであれば、本県は山で行こうとかね。川根本町などは、始めから40人しかいないです。そして、昔のマドラス、今はチェンナイに留学して、ゾーホー、インドのインターネットの会社に就職する子も出てきました。全国から募集していますから、そうしたものは、不便な所ですけれども、ゾーホーの社長から見ると、川根は光ファイバーが来ているから天国らしいのです。そういう意味で、これも具体的な中身が提案されて、おもしろいなと思った次第です。

それから、伊東委員から、実は静岡市にしろ、浜松市にしろ、政令市ですから、権限が一緒でしょう。教育費も、いろんな権限、お金も、そこで回っているわけですね。ですから、これは一体でやるよりも、実際

には向こうは自立した方が良いと、また県も自立した方が良いと。自立ができないなら、一体化した方が良いと。そういう思い切った、人を育てるためにどうしたらいいかということを行行政の在り方がどうあるかということも、実は問題提起として入っていましたね。

それから、外国人、ここでは労働者という言い方は、確かにそういう形で今、政府の方が受け入れるということですがけれども、我々の基本方針は一緒に生活している人たちだと。370万人弱の中に今9万人の外国人がいらっしゃいます。大体5,000人ずつぐらい、毎年入って来られて、大体、5,000人ずつぐらい出ていっています。だけど、入って来られる外国人の数の方が、静岡県から出ていく若者の数よりも多いわけです。純流入の方が多いいということ。ただ、外国人を人口動態の中には入れないという形で政府が発表しているものだから、我々の人口が減っているみたいですが、実際は増えているわけですね。純増なわけです。

そういうことで、もうその人たちが一緒に仕事をしたり、学校で学んだりしているお子さんがいらっしゃるの、もう生活者として見るということですね。そうした方々の割合が大体1割くらいまでいくと、いろいろと問題性も含めて出てくるようです。

例えば、今、男女共同参画という言い方をしていますけれども、あれをやめてくれという人が出てきました。なぜかという、LGBTといういわゆる性的少数者の人たちがいますね。レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスセクシャルと。こうした人が13人に1人いるというわけです。そうすると、そのことが表面に出てくると、今度はそれが社会の問題として議論されるようになるということです。

今、370万のうち、わずか9万人ですから、まだ外国人という形で何となく外国として見ていますけれども、生活者の一部にしていくには、もう少し、もっと自然な形で受け入れていく必要がありますね。労働者として見るというのではなくて、我々みんな労働者ですから、広い意味ではですね。仕事をしている人ということです。

そうした方々の御家族がいらっしゃいますね。お子様にどう差別しないかということと同時に、伊東委員が言われたように、いわば生かし合うかと。外国のお子様を言ってみればグローバル化の国際社会というか、民族、宗教、肌の色、言葉、全部違う人たちと一緒に生活しているという、その生活の仕方にどう生かすかという。その仕組みをちょっと考えてみたらどうかというのは、非常に良い御提言をいただいたと思います。

それから、小野澤さんはやはりスポーツの原点、横浜に行っていて、そういうスポーツというものをとおして、人がいかに目覚めるかというか、そのスポーツによって人間育成ができるということをおっしゃっていただきまして、それぞれプロがこちらに座っていらっしゃるの、その中から具体化できるものを来年度、実験的にでもやってみたいと思います。

ですから、どれをやるかということなどをこちらで決めていただいて、実践委員会にもそれを戻しながら、社会でどういうふうにお手伝いができるかと。

基本的に、今までの教育のままでは具合が悪いという共通認識ができているのではないかと思います。しかも、閉塞感とか閉鎖的な教育環境という、そういう認識も委員の方から出されているので、それは中から壊すのは大変難しいのですよ。

例えば、馬車の代わりに、馬車をやめて鉄道にしろと。なかなかできないです。だから、傍らにそれをつくればいいのですね。次、自動車になるから鉄道は要らないと。鉄道の傍らに自動車道路をつくってあげればいいと。そうすると、従来のものも残るし、新しいものを伸ばすということ。

ですから、旧来のものを全否定するということはやめて、そこに対して新しいものを付け加えていくと。和ですね。足し算の観点でやってあげればいいと思います。

何を足すと、いわば突破口になるかということで、我々は今までスポーツ、磐田でまず実験しよう。それから、加藤委員などは農業をビジネスとして中学生に下ろしていくという。そこまでやっていただいて、これは余りに重要だということで、実践委員会からこちらに上がってきていただいて、今やっているわけですね。渡邊委員のような、PTAの代表ではありますけれども、高校の中にクラブをつくっていくような、社会が高校生という年代のところを下りていって、仕組みをつくっていくと。幾つかできているので、何か具体的にやりたいと。

それからまた、ここに入っていないけれども、矢野委員長ほか、今、高校の合併について、8クラスないといけないということに本当にそうなのかということを実践委員会で議論されたことがあったと思います。ですから、高校は8クラスを持ってないと全部合併すべきだということで、従来の歴史は一切関係なしに、ある一つのところに集めて、不便な交通アクセスを子供たちに強要するというようなことにもなりかねなくなっております。

今、少なくとも伊東市で、3つの高校を1つにする。沼津市で2つの高校を1つにすると。御前崎と掛川と全く違うところの地域の高等学校をどちらか1つにしてしまえというふうなことが具体的なことになっていきますけれども、そうしたものは巧妙にここに避けられているわけですね。だから、そういうものを遠慮なく議論した方がいいと思っています。

矢野委員長、どうですか、見に行かれて。

矢野委員長： これからどういう議論をしようかという話は、冒頭、余り触れませんでした。少し今のお話にも関連しますので申し上げます。現実問題として、両親への思いというのを付度いたしますと、何で学校に行かせて

いるのに塾に通わせなければいけないのか。これは実に大きな問題です。簡単に解決できる問題ではなくて、日本中全体の問題ですが、教育の質というものをやはり考える必要があるのではないのでしょうか。何か解決のきっかけが生まれたら良いのではないかと思いますね。

実質、教育費は非常に高くなっているのではないのでしょうか。家計負担の大きな一要素になっていると思うのですね。

それから、確かな学力、実力でも良いのですが、向上させる中で、高校再編のお話が出ましたが、選択肢が統合一つしかないのはどうか。子供の数が減り、クラスの数が減るから統合するのが良いのだという、そういう公式だけでは問題解決しないと思いますね。他に色々な選択肢があっても良いのではないのでしょうか。

本当にそういうことで教育が充実できないというなら、先生の数を増やすという選択肢もあっても良いのではないのでしょうかね。中学校ではそれができたわけですから、高校でできないはずがないと思います。

それから、みんなで育て上げて、学校教育を高めていこうというわけですから、地域の意見もよく聞いて、みんなが支える学校を目指すことが大事です。その際、統合した方が良い場合もあるし、そうでない場合もあるということですから、弾力的に取り組む必要があります。

これは、来年度の実践委員会で、今年度もやりましたが、しっかり議論していきたいなと思っています。

それから、冒頭、農業法人のことを申し上げましたが、どなたかお話しになりましたが、産官学の連携ですね。これまでもずっと考えてきたのですが、もっと力を入れて取り組む必要があると思います。

社会総がかりで教育を良くしようという、その社会の中には産業界、経済界というのは重要な要素で入っておりまして、その会社の社員の子供たちが学校に行っているわけですからね。実は、同じものなのですね。そういう経済界、産業界の協力を得ながら進めていくというスタンスをもっと強くした方が良いのではないかと思います。

それから、生涯学習ということ長く言われているわけですが、これも以前も申し上げたことですが、それに対応する生涯教育の場を設けることが大事でありまして、義務教育とか高校、大学教育という、そこにとにかく議論の焦点が集まりがちですが、就学前の子供たちの教育、大学あるいは大学院を卒業して、社会人になった人たちへの再教育。学校を卒業して就職しても、もう一遍やり直したいという人たちはたくさんいるわけです。そういう人たちに再教育、再訓練の場があるようにする。志せば幾らでもそういう場所があるという県にしたいですね。

どなたかのお話にもありましたが、やる気のない子には教えようがないというのは事実ですが、やる気のある人たちには何とかそういう教育の場を与えたい。それも産官学が協働してやれることだと思いますね。

県の力は非常に大きいわけでありまして、予算とか人の配置なども非

常に有力であります、限りがありますので、みんなで力を合わせていくということではないかと思えます。

この4つのテーマは、それぞれに十分意味のある大事な内容だと思いますので、これで取り組んでいきたいと思っています。

川 勝 知 事： ありがとうございました。
 とりあえず、一通り御発言いただきましたが、補足的に。
 では、藤井委員から。

藤 井 委 員： この場は各論の議論をする場ではないと思いますが、あえて一つだけ申し上げたいのは、先ほど私が申し上げた中で過疎地に全寮制の学校をと
という話をしました。いや、都会の方が良いというお話があったのですが、私
があえて過疎地と申し上げたのは、一つの理論的な選択肢として触れたもの
です。知事が先ほど言われた高校の統廃合という話については、それは人口
減少だとか、いろんな社会的変化に基づく一つの考え方だと思うのですけれ
ども、統廃合をしなければいけないような地域に、あえて新しい学校、新
しい仕組みの一貫校を全寮制で投入することによって、地域の活性化を図
れる可能性があると思うのですね。中高一貫でグローバル人材を育てる、
地域の活性化もする。そして、教育現場の変革を牽引するような役割も果
たせるのではないかと。従って、一石三鳥、四鳥を狙って、あえて実は過
疎地と申し上げた次第です。

過疎地といっても、本当に山奥の人も出入りできないような過疎地という
イメージではなくて、ある程度、交通インフラ、社会インフラが揃っている
ような過疎地ですね。そのようなところであれば、御家族にとっても、場
合によっては通勤圏内になるかもしれない。そういう一縷の望みも含めて、
色々なことが考えられます。

統廃合をする場合でも、例えば2つの学校、あるいは3つの学校を統廃
合する時に、1つの学校を今申し上げたような全寮制に姿形を変えて、新
たなスタートを切るということも理論的には可能だと思っている。

そう思った思いで、これはかなり議論が必要だとは思いますがけれども、
あえて過疎地に対して、そういう一石を投じる案があってもいいのではない
かなという意味で過疎地ということを申し上げました。

もう一点、先ほどアルゴリズム人材の育成というお話がありました。プログラ
ミングのお話もありましたけれども、とにかく今の日本の教育の成果とし
て、そういう人材を育てていないことが実態としてある以上、先ほども申
し上げた10年先、20年先の日本を見据えると、その辺の人材が国際社会
の中で日本が埋もれないためには絶対必要なわけですね。そのための教
育がほとんど今なされていない。それで、プログラミングを小学校からや
るとするのは良いのですが、もっと計画的に、これは県の問題じゃなくて、
日本全体の問題だと思えますけれども、教育の

中でそういう人材をしっかりと育てていくような仕組みを考えていかないと、本当に立ち行かなくなってしまうのではないかなという危機感、危惧を感じております。以上です。

川 勝 知 事： では、伊東委員。

伊 東 委 員： 藤井委員がおっしゃるのもよくわかります。だから、両方やれば良いのです。別に1個にこだわる必要はないと思うのですね。いろんなタイプのものをどんどん進めていけばいい。

それから、資料3の4つ目のところに、「高等教育機関と初等・中等教育との連携の在り方」とありますけれども、これもちょっとしつこいぐらい言っていますが、連携の在り方よりも先に、高等教育機関の在り方というのをきちんと議論しないといけない時期に来ているはずなのですよ。

大学の統合とかも始まっていますし、それから国公私を超えた大学の連携というのもありますよね。それを大学に考えさせてはだめなのです。特に、国公私の連携の在り方というのは、大学の中だけで考えさせるとろくなことは出てこないですよ。むしろ、外からどんどん、こうあって欲しい、こうあるべきだということを言うべきだと思います。そういうことをきちんと議論しておく必要があるのではないかと思います。

特に、具体的に県内で大学の統合の話も進んでいますし、それから農林大学校ですか、それも新たに開学することになっていますし、静岡県の高教育の未来というか、それをきちんと一回議論する必要があるのではないかと考えていて、その中で初等・中等教育との連携というのも出てくると思うのですね。

それから、ちょっとこれはフライングというか、言ってはいけないのかもしれないけれども、あえて言いますが、静大って附属がありますよね。附属って、今、学校・園、全部で7つあるのですよね。幼稚園とそれから特殊教育とか含めると。単独の地方の国立大学で、附属学校・園7つも持っているところって、ほとんどないです。

僕が学長をやっている時から、その附属7校をずっと維持するのは難しいと言われていたのですが、でもそれぞれの学校って、それぞれの地域ですごく愛されているところもあるし、それからその附属にそれぞれの特徴、役割というのを持たせて、地域と一緒にこの学校というのが、その役割というのをきちんと果たせるような形にしていかないと、7つの学校を維持するのは難しいよねというのはずだったと思います。

こういう立場になって、改めて言わせてもらおうと、先ほど両方やってしまえば良いのではないかとやったうちの一つの資源というのは附属かもしれないですね。

その附属学校・園も含めて、もっと学校の外から、学校にこうあって欲しいということを、特に高等教育に関しては言うべきだと思うのです。

ね。小中高に関しては、比較的地方行政の枠の中でやっていると思うのですが、高等教育に関してはあれですね。

特に、私学とかも含めて考える時に、言いにくいこともあるのかもしれないけれども、地域としての要望は要望として、はっきり出すべきだと思います。

川 勝 知 事： ありがとうございました。

きょうは11時20分に締めるべき形になっておりまして、余り時間は残されていませんけれども、自由に御発言をその中でしていただければと思います。

では、加藤委員、どうぞ。

加 藤 委 員： アルゴリズムのところ、そんなちっちゃい話をしてはいけないのかもしれませんが、思い付いたので話します。

産官学連携も含めて、これを題材にしたなら、みんなうまく回るのではないかなという案ですけど、実は今、静岡の中央卸売市場の業務改善にちょっと携わり始め、私が火をつけて、勝手に盛り上げてやっているのですが、その時にワークショップを卸のおじさまたちが、ポストイットも使ったことがないだろう80、90人ぐらいが集まって、今、業務改善に向けてスタートを切っています。その中で、業務フローを整理すると、結局、それを整理しながらアルゴリズム教育になってしまうのですね。

それを例えば、高校生が小・中学校で、先生たちにヒアリングをしながら、業務フローについて話し合うと、何となく先生たちもおとなしくというか、従うのかなと思ったり、大学生が高校とかへ出向いてもいいですし、先生方はお忙しいので、今さら業務改善でワークショップして、一から解析して、ここのプロセスは要らないなどということは、多分やっていられないし、民間のどこか大手に丸投げすると、またすごくお金を払うことになるので、そこを地域で「簡単にしようよ」と素直に言える人たちは、案外学生なのではないかなと思っています。

そこにちょっとしたプロの生産改善、例えば、私たちは今、矢崎総業の方の農業現場の業務改善などをやっていますが、生産工程のプロフェッショナルたちは静岡にたくさんいますので、そういう方たちを入れながら、このプロセスは融合させよう、ここは削除、ここは飛ばしていこうとかやっています。色々なフローを見れば、勝手にアルゴリズム教育になっていくと思うので、うまくその辺を融合して企画していくと、事業をしながら、何かプログラミングなんか、Cとか何とか、ぺらぺら書くことではなくて、本当にアルゴリズムそのものを実体験の中で学んでいくのではないかなというのは思ったので、また何かどこかで、おもしろがってやってくれる先生がいるところでやってみたらいいのではないかなと思います。

川 勝 知 事： ありがとうございます。

そろそろ時間も詰まってきましたけれども、来年度の協議事項が、この資料3ということですが、この4つの項目に必ずしも入りきらないのも、今のお話もそうですけれども、地域の実情に応じた、あるいは地域の特色に応じた教育システムの構築とか、そうしたものに入れた方がいいかというのをございます。

それから、必ずしも学力だけでもない。スポーツなどもそうでしょうけど、また芸術にしても芸能にしても、これは十分に人が生きる道として追求するものとして、どれが一番高い道かということはないと思います。

ですから、どうも事務局の案で入りきらないものが大分言われましたね。それから、矢野委員長から、確かに塾に行かないと良い高校に行けないとか、塾に行かないと良い大学に入れないと。これは、もし塾に行かないと良い高校に入れないとすれば、義務教育の破綻ですね。ですから、これは本末転倒していると。

実際、いわゆる貧富の格差で、恵まれない子供たちにどうするか。塾に行くお金を上げてくださうというふうに県の幹部が言ったので、それはおかしい。ですから、それはもう義務教育というものが破綻しているということを宣伝するに等しいから、それだけはしてはいけないと言ったことが思い出されますが、ですからこういうことと併せて、また思い立った時が吉日ですから、そのときに勉強できるようなシステムをつくっておかなければいかんということで、生涯学習といいますか、生涯研鑽ができるような、そういう機関をつくらないといけないというのもあります。

それから、あれかこれかではなくて、あれもこれも、どのように両立させるかということで、多様な選択肢を提供していくということも出てきました。

小野澤さんが入ったからかと思いますが、今日は何かもう百家争鳴というか、侃侃諤諤というか、もうバラバラというか、それくらいおもしろい議論で、突破口を開けようという委員の方々の気持ちがそれぞれの御提言にはっきりとあらわれていたように思います。

それで、議題をどのようにしていくかということですが、事務局は聞いていてどうですか。次の議論にまとめられますか。総合教育会議は次年度も4回ありますね。もちろん、実践委員会もそれにあわせて4、5回開催するわけですが、どこか、これは絞ってやるというのは。

事 務 局： 絞ってやる、もしくは回数を考えながら調整していきたいと思っております。

川 勝 知 事： 一応、小・中学校というのは市町に委ねられているという面があります。高等学校、大学、幼稚園は県がやっているのですよね。

木苗教育長：　そうです。

川勝知事：　その辺のところはこちらでもできるということでございます。

先ほど、藤井委員から出た、いわゆる全寮制の学校、そういうものを突破口としてやるかどうかということについては、こういうことを議論することに委員の先生方は御賛成ですか。

賛成。そうすると、仮に都心部につくるのか、あるいは過疎地なのかというのは当然あると思います。仮に過疎地だと南伊豆か、あるいは川根本町か、あるいは春野か、天竜より北ですね。幾つか、もうそういうところで実行可能な場所というのはありますよ。高校があつて、そういうところでやっていけそうなところというのはあるとは思いますが、そうした時にどのようなカリキュラムを組んでいったら良いのかということと、どういう人材がそこで揃えられるのかということもあつて、こういう議論もして良いと委員の先生はおっしゃっているのです。

それから、どうしても次、議論すべき協議事項。これは一応、4つありますけれども、これをやって欲しいと。事務局としては、これを順番でやって欲しいらしいのですよ。それで、今年はラグビーワールドカップや来年はオリンピック・パラリンピックがありますので、これにかかわる教育をどのように充実させるかということは、やって欲しいわけでしょう。

ですから、差し当たって、「内外で活躍できる人材の育成」ということで、ラグビー、オリ・パラ、文化プログラムもあります。こうしたものを柱にしながら、こうしたものに対応できる高等学校の教育だとか、中学校からの教育だとか、これをどうするかということについて試みてはどうでしょうか、次は。

矢野委員長は、実践委員会に持っていくのに、音読をやるべしとかはよろしいですか。

矢野委員長：　実践委員会も百家争鳴でしてね。経済界の人もいますし、芸術の分野で大活躍している人もいますし、農業、あるいは漁業、色々な方がおられまして、実にさまざまな意見が出ますので、全寮制の学校については皆さんに諮ってみたいと思います。自ずと重点というのは明らかになるのではないのでしょうか。音読については皆さんの賛同を得ていますので、是非普及したいと思っています。

川勝知事：　一方、こちらにも、経済、海外で場数を踏んでこられた方が相当いらっしゃいます。それと実際に実業されている方もいらっしゃるということでもありますので、産官学、産業と人材育成というものをどのように融合させるかといいますか、お互いに人材育成に産業界が入ってこられるには、教育界としてどのような受け皿をつくったらいいかというこ

ともあると思いますね。

ですから、私はもう大学を長く、先生もそうですけど、私のように人文系、社会科系の者は、優秀なのは皆、実業界に行くわけです。だめなのは大学に残ったりするのですよ。学者が一番偉いわけではないのです。確かな学力なんていうと、本当に優れた人は必ずいますから、その人は放っておいても勉強します。大体、10代の全般ぐらいで、恐らく小野澤さんもそうだったと思いますけれども、自分の好きなものが何かということがわかっている人もいるわけですね。

ですから、そういう意味で学力偏重はよろしくない。ただし、学力が大事だということは必ず人生のどこかで気付くはず。ですから、基礎的な学力は小・中学校でしっかりと教え込まないといけないと思いますけれども、さまざまな夢とか、それからどうしても助けが要る特別支援学校の学生さんのような場合には、その支援をどうするか。外国人の方もそうですね。

それから、日本語と外国語ですけれども、正しい日本語をいわば国際共通語として使うというのが恐らく日本社会における方針になるのではないかと思います。しかし、これは外国では通じませんから、差し当たって英語とかになるのかもしれない。

しかし、日本語を忘れた英語などというのは、根なし草もいいところでもありますから、従ってこちらでは日本語を国際共通語にしていくというぐらいのつもりで正しい日本語をしゃべるといいますか、書けるようにするというのも大事ではあると思っています。

色々と意見が出まして、本質的な議論もありました。一方、制度的に改革して突破口を開けようということで、幾つかの議論もありました。それから、最後に伊東委員から、今、静大で大学の編制について具体的な課題になっておりますが、これはここで議論して欲しいということもございましたので、議論すべきことはたくさんありますが、事務局で今日出た意見、上手に整理していただいて、また実践委員会にも出たいただいて、そこで次に諮るべき協議事項を絞っていただきたいと思います。

時間がもう押してまいりましたけど、教育長先生、何か一言ありますか。よろしいですか。どうぞ。

木苗教育長： 皆様には、本当にお忙しい中を御出席いただきまして、いろいろと御議論いただきましてありがとうございました。

特に、川勝知事、矢野委員長様を始めとして、「地域自立のための『人づくり・学校づくり』実践委員会」の皆様、あるいは総合教育会議の運営に携わっていただきました事務局の皆様含めて、この場をおかりして厚く御礼申し上げます。

元号が変わり、平成という時代が終わり、今年はラグビーワールドカップの開催、それから来年にはオリンピック・パラリンピックの開催が

あります。子供たちにとっても新しい時代を迎えます。また今、小中高
大という強い連携を組もうとしておりますので、静岡方式の新しい形が
生まれてくれればありがたいなと思っています。

教育委員会としては、皆様の御意見を十分に理解いたしまして、また
このようなコミュニケーションをとりながら頑張っていきたいと思いま
すので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

今日はありがとうございました。

川 勝 知 事： どうもありがとうございました。

事 務 局： 最後に済みません。

資料の最後に資料4というのがございまして、教育振興基本計画を昨
年度策定いたしまして、今年度初めて評価をいたしました。

最後に申し訳ありませんが、推進委員会の委員長を矢野委員長にお務
めいただきましたので、一言御感想だけ申し上げていただきたいと思ひ
ます。

矢 野 委 員 長： 余り時間もありませんので、簡単にやります。

実は、今年度が初年度でありましたので、成果というものがはっきり
出ているものもありますけれども、そうでないものもたくさんありまし
て、どう評価するかということが議論になったわけですが、時間をかけ
て見ていこうという大局的な方向であります。

そして、これは世間でもよく行われているP D C Aサイクルを回し
て、中・長期計画でありますけれども、それをきちっと毎年見直して、
そして磨き上げていくと。同じものをずっといつまでも持っているの
ではなくて、環境も変わりますので、そういうP D C Aサイクルを回し
て、毎年見直しを行いながらつなげていこうということでもあります。

そういう観点で、これからも評価委員会を毎年開催しまして、きちん
と結果について調べて、そして次の年に生かすというふうにやっていき
たいと思ひます。

それだけ、ちょっと触れておきたいと思ひます。

川 勝 知 事： どうも失礼いたしました。

よろしいですか。

事 務 局： ありがとうございました。

皆様、長時間にわたり、お疲れさまでございました。

以上をもちまして、第4回静岡県総合教育会議を終了いたします。あ
りありがとうございました。